

デーリー東北

2021年(令和3年)6月3日(木曜日) (17)

私見創見 Thursday

「ワンオペ育児」という言葉がユークリネット・流行語大賞にノミネートされたのは2017年だ。私の夫の仕事も専門的で勤務地が限られ、どちらかが仕事を辞めない限り

同居できないため、私たちは夫婦は離れて住んで15年ほどにもなる。夫が育児休業を取ろうと上司に相談したこともあったが、当時は制度があっても慣例により実際に利用することはできなかった。

両親は東京と宮崎、親戚も北海道、新潟、宮崎などに住んでおり、身内は青森には1人もいない。ワンオペ育児という言葉がある前から、仕事と育児を続けてこれたのは「遠くの親戚より、近くの他人」を頼ってきたためと言っても過言ではない。

フルタイムの仕事に加え、2歳半差の乳児と幼児の面倒を1人で見るのは、本当に大変だった。3人とも健康な時は、保育園を利用しながらなんとか生活は成り立つが、1人でも体調を崩せばもう、圧倒的に人手が足りない。午後6時に帰宅して、夕食、入浴、家事を終わらせ午後9時に寝るまでノンストップだ。2人の小さな子どもの面倒を1人で見ながら、フルタイムで仕事をするのは、単純に人手不足だった。

近くの他人の方で一番お世話になったのは保育園。同

ワンオペ育児を経験して

子育てで疲弊しない社会を



鮎川 恵理

八戸工業大
生命環境科学科准教授

あゆかわ・えり
1973年、東京生まれ。総合研究大学院大博士課程修了。2004年から八戸工業大で勤務。植物生態学が専門で、コケ植物の生態や海岸植生が主なテーマ。青森県環境審議会委員などを務める。00～01年の第42次南極観測隊に参加した。

世代の先生が同じ年齢の子どもを持つのに、平然と朝7時前から勤務していたり、妊娠中の大きなおなかの先生が走り回って運動会を切り盛りする姿に励まされたり、夕方の疲れた顔を玄関で優しい笑顔で迎えてくれる先生たち

に元気をもらい、保育だけでも持つのに、平然と朝7時前から勤務していたり、妊娠中の大きなおなかの先生が走り回って運動会を切り盛りする姿に励まされたり、夕方の疲れた顔を玄関で優しい笑顔で迎えてくれる先生たち

ちには元気をもらい、保育だけでも持つのに、平然と朝7時前から勤務していたり、妊娠中の大きなおなかの先生が走り回って運動会を切り盛りする姿に励まされたり、夕方の疲れた顔を玄関で優しい笑顔で迎えてくれる先生たち

伝つてくださった。また、八戸市内で引越した先では、市ファミリーサポートセンターのNさんとRさんに、帰宅が遅くなる時、日曜・祝日出勤時などに保育をお願いした。公立の学童保育がなかったため、個人経営の学童保育にもお世話になった。

大学の講義では代わりの教員はいないため、病児保育とかがりつけの小児科の協力で、なんとか講義を休まずに済んだ回数は数えきれない。また、次女が生まれたあとに、長女の夜泣きが始まった時には、自分の責任を感じつつも、保育園のベテランのY先生と小児科のH先生に相談した。さすが、子どものプロ。保

育園の先生からは土曜日は仕事がなくとも、また赤ちゃんの次女を園に預けて、長女とゆつくり過ごしてあげるとのこと。小児科の先生からは、夜泣きに効く安全な漢方薬があるから使ってみよう。どちらのお答えも、まさに目からうろこだった。自分1人で、どうにもできなかったことが、プロの助言であつという間に解決した。

子育てだけではないかもしれないが、自分1人でどうがんばっても、どうにもならない時、先輩や経験豊富なプロの方に助言を求め、助けてもらうというのは、本当に重要だと感じた。サポートしていただいた方々への感謝は、自分の仕事を全うすることで社会にお返ししていきたいと思っている。

さて、私の住む八戸市では、この15年で病児保育や病後児保育が倍増するなど、働きながら子育てするための環境は確実によくなってきている。だが、果たして実際に子どもを持つながら、フルタイムの仕事をする女性に、性

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。